

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

「近世国学の靈魂觀をめぐるテキストと実践の研究」プロジェクト相馬地方調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學研究開発推進機構 公開日: 2023-02-08 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001795

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究」プロジェクト 相馬地方調査報告

目的および計画

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究」というプロジェクト名を掲げる当研究事業では、陸奥国相馬地方（福島県南相馬市）の気吹舎門人・高玉安兄の生家に所蔵されていた、幕末・維新期の平田鏡胤書簡の翻刻作業を進めてきた。高玉家の書簡は、「相馬地方における平田鏡胤書簡（I）～（VI）」として『日本文化研究所紀要』の誌面に掲載されているが、現在は、改めて公刊する際に読者の理解を助けるべく、難読文字の再確認とともに、年代推定・語句の説明といった書簡の内容に関する検討を行っている。2010年度は高玉家旧蔵書簡の整理については、前年度から引き続いて平田鏡胤差出分の再翻刻作業を進め、特に、語句の註釈・索引作成のための準備が進展した。また、当プロジェクトでは、平田鏡胤書簡の翻刻・年代推定を行い時系列で並べ、隔週で開催する研究会にてメンバー同士で読み合わせも実施した。年度内にデータ化したものの全てを確認することはできなかったが（全体の8割程度確認済）、以前活字化した際の誤読の発見や難読文字の比定など、データの精度を上げる成果を見ている。

相馬地方の気吹舎門人の特徴としては、社家の割合が多いことが知られており、国学の靈魂観の問題を实践面と深く関連付けて検討することが可能な対象でもある。高玉家旧蔵の書簡類には、高玉家以外の相馬・奥州の気吹舎門人たちに関する話題や、地域の動向が多く記されている。こうした記述をより深く理解するために、2011年3月9日から11日

にかけて、相馬周辺の門人たち（特に社家）に関する資史料の調査と巡見を計画し、実施した。なお、参加者は松本久史（研究代表）、遠藤潤の兼担・専任教員と、小田真裕、小林威朗の研究補助員および共同研究員の三ツ松誠の計5名であった。

神社の巡見

訪れた神社は以下の通りである。気吹舎門人関連の神社としては、高玉安兄が奉仕していた相馬小高神社（南相馬市小高区小高字城下173）および貴船神社、益多嶺神社甲子大国社（同市小高区大井宮前144）（田代三河）、蛭澤稻荷神社（同市小高区蛭沢字広畑175）（佐藤大和）、日鷲神社（南相馬市小高区女場字明地159）（西山伊賀）、熊野神社（同市小高区北鳩原字不動前133）（半谷日向）、白旗神社（同市原町区堤谷）（鈴木石見）、稻荷神社（同市小高区飯崎）（只野土佐）、標葉神社（双葉郡浪江町大字苅宿字鹿畑128）（苅宿伊豆）である。そのほかに、相馬領の主要な神社として、多珂神社（南相馬市原町区高字城ノ内）、相馬太田神社（同市原町区太田館腰139）、涼ヶ岡八幡神社（相馬市坪田字涼ヶ岡51）、相馬中村神社（同市中村北町140）も踏査した。

式内社をめぐる論点

これらの神社の歴史を概観すると、高玉安兄を中心に組織された相馬領の気吹舎門人社家には、興味深い共通点が浮かび上がってくる。それは「式内社」比定についての問題である。近世中期以降、全国各地で地域の学者

や神職による地元地域の式内社がどこであるかの研究が盛んになってくる。遠江国の国学者による式内社比定の事例について、かつて拙稿をものしたこともあるが（拙著『荷田春満の国学と神道史』弘文堂、2005年所収）、東北においては、17世紀後期に保科正之の実施した会津藩領の式内社調査が時期の早いものとして知られている。相馬藩でも文化12（1815）年に式内社調査が行われている。

その調査に際して、安兄の父である高玉丹波は、自身の奉仕する貴船神社こそ、行方郡の式内社八社のうち唯一の名神大社、多珂神社であるという主張を展開した。一時は認められるものの、再調査の結果、現在の多珂神社こそが式内社であると藩に認定されたため、高玉の主張は結局は認められなかった（式内社研究会『式内社調査報告』第14巻、皇學館大学出版部、1986年、914～919頁参照）。また、門人の田代氏が奉仕する益多嶺神社は、現在でも「甲子大国社」と通称されているが、文政期に益多嶺神社と称したという（小高町『小高町史』1975年、855頁）。おそらく文化12年の調査に際して田代氏が主張し、こちらは高玉のケースとは違い、そのまま藩に認定されたようである。ほかにも、苧宿伊豆（俊彦）が神主であった天王社（標葉神社）が、幕末期に式内社「標葉郡苧野神社」であると主張したケースも見られる。なお、苧宿伊豆は安政6（1859）年に藩の許可を得ずに吉田家から「大宮司号」を取得して藩から処罰され、職を奪われて子の玄蕃がそれを継いだという（浪江町教育委員会『浪江町史』1974年、417頁）。蛭澤稻荷神社も式内社「冠嶺神社」と称していた時期があったことも窺われる（『小高町史』861頁）。なお付言すれば、同社の神道護摩壇は國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館に展示されている神道護摩壇のモデルでもある。

このように、高玉と関係する社家の奉仕する神社の多くが、自社を式内社であると主張

している。この事実が意味するものは何か。高玉安兄が気吹舎に入門した経緯は不明であるが、この文化～文政年間の相馬藩式内社調査にともなう争論が影響した可能性も推定される。また、門人の多くも式内社を主張していることも、その学問的な裏づけとして平田学を受容しようとした目的の一つであったかもしれない。今後、関係史資料を分析し、慎重に検討を加えていくこととしたい。

墓地

高玉家および苧宿家の神葬祭墓地も訪れることができた。益多嶺神社の近傍にある高玉家の墓地は近年改葬されており、当時の状況は分からなかったが、安兄やその子篤義などの生没年等は確認することができた。苧宿家については、中世からは姓は阿部氏であったが、天保12（1841）年に苧宿氏に「復した」とされ、『旧事紀』に記述される染羽国造足彦命の子孫と自称している（『浪江町史』、418～419頁）。浪江町にある苧宿家の墓石（口絵参照）にも「染羽国造」としっかり刻まれている。なお、福島県の民権政治家として著名な苧宿仲衛（安政元年；1854～明治40年；1907）は、玄蕃俊昌の子である（『浪江町史』、532頁）。このように、墓碑に注目してみても、歴代の社家として、「復古」の意識を垣間見ることができよう。これは同時に式内社の主張とも根底は共通しているとも考えられよう。

今回の調査では、引き続き3月12日に福島県歴史資料館にて、相馬地方を中心とした地方史料の閲覧を行い、銚胤書簡における話題の背景を探る予定であった。しかし、11日の14時46分に発生した東日本大震災により、調査自体を中断せざる得なくなった。われわれは中通地方の桑折町で震災に際会したのだが、幸いにして、調査メンバー全員が怪我もなく無事に帰着することができた。その

際、多くの方々にご心配と労いの言葉をいただいたことに改めて感謝したい。しかし、踏査した地域、特に相馬市、南相馬市の海岸部は、津波による甚大な被害を受け、多くの人々が犠牲になった。謹んで哀悼の意を表したい。

相馬地方を再訪して

現在は、高玉安兄関連の門人社家の奉仕した神社は、全て東京電力福島第一原発の半径 20 キロ圏内の警戒区域の中にあり、立ち入ることができない状況になっている。2011 年 7 月 22 日から 25 日にかけて、「野馬追祭」が実施され、犠牲者の追悼と復興を地域の人々が祈念する様子はテレビや新聞等によっても報道された。松本は祭りにあわせて南相馬市を再訪したが、高玉をはじめ、門人社家の神社については、残念ながら状況を確認することはできなかった。同祭は本来であれば騎馬戦や甲冑騎馬行列などが催され、全国からの観光客も多い祭りであるが、それらは中止もしくは期日が短縮され、今回は 3 月の調査でも訪れた、相馬中村神社、相馬太田神

社、相馬小高神社の「三妙見」の神社祭礼を中核とし、規模を縮小したものとなった。ただし、かつて高玉安兄が奉仕した小高神社だけは、20 キロ圏内のため、圏外ぎりぎりに立地する近傍の多珂神社の境内を借りて小高神社の例祭が執行された。まさに、かつて高玉が式内社論争を挑んだ神社で小高神社の祭礼が行われたことにつき、深い感慨を禁じえない。野馬追祭に懸ける地域住民の篤い思いを目の当たりにして、現在でも多くの人々が避難所・仮設住宅暮らしを余儀なくされ、三重四重の苦難を受けているこの地域の人々にとって、神社の祭りは復興を期する人々の心の支えになっているのだ、と感じるところがあった。また、当該地域を調査対象とするわれわれも、歴史史料を保存し、次世代へ継承することにより、地域の復興の一助としたいという願いを強く持っている。

最後に、災害からの復興のために、われわれ人文系の研究者のできることを、一つ一つ考え、実行することが求められていると痛感していることを付け加え、筆を置きたい。

(松本久史)



馬を神前に奉納する上げ馬神事
(多珂神社 (福島県南相馬市) 境内)



打上げられた漁船
(福島県南相馬市)